

---

# 血 + @ - @ = 必要性

七宮 ハル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

血+@-@||必要性

### 【Nコード】

N7674J

### 【作者名】

七宮 ハル

### 【あらすじ】

血液に満たされたバスタブ。その中に、魔物はいた。

「吸血鬼キリイ・エリオツド」

これが「それ」の名……。しかし、それを、名で呼ぶ者はいない。誰もが叫ぶ「化け物」と。人間だけでなく、同胞の吸血鬼にまで。しかし、それは、それで満足だった。化け物として恐れられるのを、むしろ、

嬉々として受け入れるのであった……。

吸血鬼キリィ・エリオツド(前書き)

今回は、それほどグロくないですっ

## 吸血鬼キリイ・エリオツド

—————ピチャンッ

薄暗い室内。

狭い空間の隅々まで充滿した、どぎつい鉄臭。

白いバスタブを真っ赤に染め上げる血液。

その中。暗いバスルームの左隅、血液で満たされたバスタブの中に

「それ」は居た。

胸上まで血につかり、ワイングラスを携えて、そこには・・・

—————魔物が居た—————

その名は「キリイ・エリオツド」

しかし、それには名前など不必要なものだった。

誰もその名を呼ぼうとしない、呼ばれた事など今の一度もない。

皆がそれをこう呼ぶ「化け物」と・・・。

これこそがその呼び名になっており、それ自身もその呼び名に不満はなかった。

—————結構な事じゃないか、本当に化け物なのだから。テーブルの上のグラスをつかむ、そしていつきに中の血液を飲み干した。

それは今、食事の真っ最中だ。けっして入浴ではない、この行為こそが、その日常の中で普段に行われている食事なのだ。

「吸血鬼キリイ・エリオツド」

これこそがその正体。もちろんこれが化け物の部類に入らないわけがない。

だから、認める。自分は化け物だと。

そして心底、心酔していた・・・その呼び名に。

今や、それは人間に恐れられるだけの存在ではなくなっていた。

同胞の吸血鬼達までに恐れられる。

「……………こんなに、こんなにも哀しい事はないじゃないか。」

誰にも愛されず、却けられ、軽蔑される。

そんな、なんとも言えぬ虚しさ。その虚しさに、惚れ込んでいた。

マゾヒズム的な感情を持ち合わせているわけではないが、いつしかその感情から逃れることができなくなっていた。

それは、渇きが満足に潤うとバスタブから上がり、全身に纏った朱のベールをゆつくりとシャワーで洗い流した。

自身の体から剥がれ落ちた血液が、床の排水口に吸い込まれるのを愛おしげに見つめた後、それは、静かにバスルームを後にした。

吸血鬼キリィ・エリオツド(後書き)

続編かくんでよろしかったらどうぞ

鬼の側近（前書き）

2話目でーすっ

今回は少し話が進む・・・カナ？

それではどー－－－－－－－－ぞっつっん

## 鬼の側近

—————コツ、コツ、コツ……。

延々と続く長い廊下に足音が響く。

壁には等間隔におかれたランプが乏しい光を発していた。

暗さのせいか、室内は異様な冷気を纏っている様に思えた。

ここでは、どこに行っても生き物の気配が感じられない。

まるで、建物自体が死んでいるような。そんな、閉塞的な雰囲気をもつ空間だ。

その空間の地下階、廊下を進んだ最深部。そこに魔物は住んでいた。誰もそこには近寄らない。その部屋を与えられてから、一度たりともその部屋を訪れた者はいない。

それもそのはず、そこには何もないからだ。ただ一つあるものと言えば、血を喰らう化け物だけだった。

しかし、その部屋に向かつて歩く足音がある。化け物が住むその場所に自ら訪れようとしている者がいた。

訪問人は栗色の髪と、まだ少年の面影を残したグレーの瞳を持つ青年。

彼の名は「ジャックル」

彼も本当の名で呼ばれたことが一度たりともなかった。

理由は至極簡単。彼は乳児の頃からずっと孤児だったからだ。

つまり、これは言わば偽の名。ハリボテでできた、ただの呼び名程度に過ぎない。

彼は最深部の部屋の前にたどり着くと、ふと扉を見やる。無駄に重厚感が溢れる重そうな扉だった。

音を発して生唾を飲み込んだ後、拳を扉に当て、ノックした。

—————コン、コン。

返事はない。

一呼吸おいた後、もう一度扉を叩こうとした拳は何にも触れることなく事なく空を切った。

扉が動いたのだ。

誰の手を借りる事もなく、軋んだ音をたてながらゆっくりと扉が開く。

(!???)

驚いて室内を見渡す。しかし、そこには何もなく。生き物の気配さえもなかった。

(?.....出掛けかな.....)

そう思い引き返そうと扉に背を向ける。

その時だった。

「こんな真つ昼間にふらついてる吸血鬼なんているの?」

まるで彼の心を読んだかのような言葉が背に掛けられた。ドキリッとして振り返る。

先程まで何もなかったその場所に誰かが立っていた。

子供がいた。

自分と4つも5つも年の違う少年。後ろでゆるく結った金茶の髪と透き通る程の白い肌。

己のイメージと相反するほどかけ離れたその容姿に意表をつかれたが。その反面、生気の抜けた虚ろな瞳と、まるで作り物のように整った顔立ちが、明らかに少年が人外の者であるという事を表徴していた。

少年がまた口を開く。

「君だろ、僕の所に配属された側近役っていうのは」

今まで、初めて見る異形の者の姿に思考を奪われていた彼であったが、

少年のその一言でようやく、自分の使命を思い出した。

そう。自分は任務を受けて今、この場に来たのだ。

上役に命令された仕事。それが、化け物の側近役だった。

こんなにも、危険で恐ろしく、残酷な任務はないだろう。

しかし、彼にはそれを受け止める路しか用意されていなかった。断ったところでのたれ死ぬだけの立場だったからだ。

自身の使命に突き起こされ、思考を取り戻した彼は、目の前の少年に向けて。

「お察しの通り。私は主様の側近、世話役を仰せつかっております。呼び名をジャックルと申す者です」

丁寧に呼び名と任務紹介をした。  
一方少年の方は。

「そう。またすぐに仕事がくるよ」

最初の、そう。の一言で用件を飲み込むと、あいさつの一つもなしに再び重い扉を閉ざしてしまった。

誰の知ることはないが。

今、この瞬間、この出会いによって一つの魔物と一人の人間の運命が劇的に変動した。

ただ「生かされる」はずの彼らが、意志を持って「生きようとする」。

世界全体的に考えればほんのカケラの影響でしかない。しかし、当の本人らや周辺の者にとっては、人生を左右させてしまうほどの凄まじい影響力を持つことになったのだ。

ただ、その変動に気づき始めた頃に彼らが一体何を思い生きるのが、非常に楽しみだ。

## 鬼の側近（後書き）

お読みいただきありがとうございますっ

ここまで読んでいただき感謝の極みでございますっ！イヤ、マチデでもでも、物語はまだ序の口この先もご愛読いただきたい、と思っております

今回はグロ表現ゼロでしたが……おそらく次回は入るんじゃないかなあ

と思います（そんな、テキストな……）

3話に後ご期待！！！！

本物の化け物（前書き）

ハアーーーーー|||||||3

途中で文がなぜか知らんが消え。3回目の書き直しです……

ああ、もう死にぞ。

それでは、どーーーーぞー

## 本物の化け物

—————ジリリリリリリリッッ！！

けたたましいベル音が室内に鳴り響く。

ジャックルは例の館の一室で部屋の整理をしていた。

どうやら、少年の言った通り仕事が来たらしい。

吸血鬼の主な活動期間は夜。そのぐらいの常識、彼も持ち合わせている。

よって、あの魔物が仕事をこなすのも夜ということだ。

そのため彼はわざわざ自分の身を脅かしてこの館の一室に寝床を置いたのだ。

ベル音の音が止むと、おそらく別館の指令室からであろう放送が館内に流れた。

「南南西25？地点に反応あり」

伝達はそれだけだった。

（反応って何の？）

誰もが同じ疑問を抱えるであろう。しかし、これどころか彼は、この任務の詳しい内容さえ説明されていない。

吸血鬼「キリイ・エリオッド」の側近役。ここまでは聞かされている。しかし、具体的に何をすればいいのかまったくわからないのだ。上から指示は自分の主に出してもらえとは言われていたが、当の主からは何の指示も命令無かった、だから結局何もわからず終いだ。しかし、側近という立場である以上、主に仕えて歩くのが当然だ。つまり、再びあの少年の下へ行かなければならないという事になる。そう、行かなければ……。

—————ああ、……嫌だ。

そんな思いがふと強くなって、胸の奥から浮上してきた。

また、会わなくてはいけない、あの化け物に。そしてこれからも、

ずっと。

考えただけで全身に悪寒が走る。

生き血を喰らい、闇に生き、人々のココロを脅かす。それが吸血鬼。そんな生温いものじゃない、「あれは」。

もつと、ずっと、あれの方が恐ろしい。

オゾマシイ……。おぞましい。オゾマシイッッッ!!。

何度言葉を重ねても足りないほどに。もうこの世の言葉では、言い表せない。

怖い、恐ろしい、惨たらしい、狂おしい、苦しい……。マダタリナイ。

強大な負の情念の塊。

あの時初めて、一目見たときに感じた。底知れぬ恐怖。

逃げ出したい。誰だってそう思う。

実際あの時、腰を抜かさず言葉を発せたのは勇敢だからじゃない。

早くこの場を立ち去りたい。早くそれから目をそらしたい。……

早く逃げたい。

そう思ったからだ。

でも、彼には逃げ道などどこにもなかった。自分に用意された路、それを外れば死。

そんな、非力な自分の立場を呪った。

—————路に従うなら、行かなければ……。

彼は鉛のように重い足をひきずり、魔物が住む部屋を目指して地下階へと歩き出した。

## 本物の化け物（後書き）

ほーーーーー、長かったーーーー。

次回こそ本当にグロ出します（マヂです！……；

次話をお楽しみに

## 後悔のその前(前書き)

今回は吸血鬼キリィに振り回される、側近ジャックル君目線のお話。

それではっ!!レッツ側近タイムっっスターーーーーートっっっ

## 後悔のその前

――ズルツ、ズルツ、ズル……。

足取りが重い。また、あの化け物の下へ……。

魔物の部屋に近づけば近づくほどに、足が重く、さらに重く。

先程見たばかりの無駄に重厚感あふれる扉が目に入る。心が、重い。  
――早く行かなければ。

そうは思うのに、反比例して鈍くなる体。

先程のベル音と放送が鳴り終わってからもう、5分近く経つ。

行ったら即殺されてもおかしくない時間だ。なんせ恐ろしい化け物  
なんだから、やりかねない。

(う……)

そんな事を考えていたらよけいに行きたくなる。逝きたくない  
なら早く行くべきなのだろうが。

ここで、一回心境の整理をしよう。心の中で自分に問う。

俺はどうしたい？ 行きたくない、逝きたくない、生きたい。なる  
ほど……。

ならば、生きるためにはどうする？ 路を外れない、仕事をこなす、  
命に従う。やはりか……。

そのためにはどうすればいい？ 任務を実行、化け物に付き従う、  
あの扉の先に行く。そうだな……。

自問自答をくり返して出た答えはやはり、行くしかないという事だ  
った。

そうこうしている内に時間は刻一刻と過ぎていく。

(……ゴクッ)

生唾を飲み込んだ後、俺は覚悟を決めて扉を押し開いた。

(……?)

どうやら、扉を開けた瞬間額を銃で撃ち抜かれる。と、いう事には



後悔のその前（後書き）

て、事で次回っ！！！

血みどろ歌劇の巻！！グログロでおとどけしますっ

てか、グロ出すグロ出すって言って何回出てないんだろ・・・；；；；；

あ、えーと。違うんですよっっ（汗）決して引っぱってるワケじゃ

あないんですっっ

マチでグロ出しますから~~~~~（必死

て、言っても信用薄いだろっなあ・・・ハァ（ 自業自得



## 殺しの十字架

「……………ああ、一体これは何だろう……地獄よりも暗い……これは、これは……」

化け物の後ろに付き従い、俺は薄暗い階段を延々と上っている。

この建物はこんなに高かったのか……。自室と地下にしか行く事がないのだから知るはずがないが。

それにしても、さっきから彼はどこに向かって歩いているのだろう。もうすぐ最上階なのだが……。しかし、彼の足はまだ止まらない。ついに最上階までも越し、屋上に繋がる扉の前へとたどり着いた。？こんな所になんの用が……。

彼が扉を押し開けると外界から冷たい風が吹き込んできた。

外では月が白く輝き、夜ならではの静けさを保っている。

冷たく澄んだ良い夜だ。隣に魔物がいなければの話だが。

ふと周りを見渡すと、本部のある別館の方から細く光る赤い糸が伸びていることに気がついた。

一体なんなのだろう、あれは。

その赤く光る糸に目を奪われていた俺は、主が屋上の隅にまで移動していることに気づかなかった。

いそいで歩み寄ると彼が言う。

「君にも見えるか、あれ。あの赤いレーザーの先に今宵の仕事場がある」

まったく、まただ。また心を読んだ様に、俺の問いたかったことに答える。

本当に簡単な説明の後に、また疑問が生まれる。

それじゃあ、ここには何のために来たのだろう。レーザーなら下からでも見えるはずだ。

俺が問いかける前に少年の方から口を開いた。

「さて、そろそろ行こうか。君も言うより見た方が早くわかるだろうしね、僕の事が」

行くと言ってもここからどうやって、あのレーザーの先に行くんだ。「うあつっーーーーー!!!?」

言うよりも早く。次の瞬間、俺の躰はヒラリと空中に浮いた。

そして、その次の瞬間には風速で躰が空を疾走し始める。

(ーーーーー!!!?)

あまりに突然の出来事に全身が強ばり、声も出なかった。

俺は一体、今どんな状況におちいつているのか。わけがわからない。

そういえばだ、さつきから何故か首もとの辺りがやけに苦しい。

もしかすると……。襟首を掴まれてる??

あの化け物が俺の首根っこをつかんで引きずり回しているのか……。

考えてみるのも恐ろしい。

その化け物は家々の屋根の上を踏んで跳びまわっているらしい。

それにしても、なんていう速さだ。みるみるうちに風景が変わっていく。

さすが化け物と言ったところか。

次々と通り過ぎる町並みに意識を奪われていた俺だが、次の瞬間に我に返った。

いきなり先程まで浮いていた躰が、いきなり地面にたたきつけられたからだ。

「たっつーーーーー!!!?」

したたか強く打ち付けた腰をさすりながら顔を上げると、少年が俺を見下ろしながらこう告げた。

「着いた。ここが仕事場だよ」

それがどんな場所か確かめるため視線を目の前の建物に移した俺は啞然とした。

なんだこれ……。

廃墟だった。それも、まるでゴーストハウスの様な。

冗談はよしてくれ。ここが仕事場？ホラースポットの間違いじゃないだろうか。

闇に包まれたその恐々しい面もちのその建物は。暗く、暗く俺を見下ろしていた。

そこに声をかけられる。

「ねえ、いつまでそうしているつもりなの？早くこないと危ないよ」  
そう言われても、脚が震えて立てないんだ。そして、どろろという事だ。  
危ない？確かに彼はそう言った。ちよつと待ってくれ。

これから一体何をするつもりなのだろう。

聞く余裕も無いまま、彼はこの禍々しい屋敷へと入って行ってしま  
う所だった。

ああ、どうしよう。

おいて行かれてはいけない。本能がそう告げていた。

俺は震える躰を揺すり起こして彼のもとまで走り駆けていった。

この直後だ。俺は見た、赤く染まった十字架ロザリオを。  
地獄より恐ろしい鬼の表情カオを。

## 殺しの十字架（後書き）

うあああああああああああ！！？

直前で終わったーーーーー……………

グロ出る前つスよおおおおお

ホントずいませんんん（土下座しますつつつまぢで  
次回iiiiiiiiiiiiiiii死んでも出します。

ひiiiiii見捨てないでえ……………ホントですからあ

噁う表情（前書き）

いやあ……、なんだかなあ……。

この頃ずっとジャックル君目線ばつかだなあ。

だっただって。その方が書きやすいんですものエへ（イラッ  
まあ、その内戻りますよ。

さあさあ、今度こそ5度目の正直ごいっぺんでツス  
グロ出しますよ—————！！  
まぢっス。

それじゃ、レッツ・ラ・ゴー—————

## 嘔う表情

「—————」声が出なかった。躰が動かなかった。眼を開けなかった。

そこには、完璧な。

甘美なまでに完璧な狂怖きょうふがあつた。

彼が廃墟の中に入っていつてしまう。

待つてつ！！。

おいて行かれてはいけない。それはもう、絶対的に。

俺はあわてて彼の背を追いかけた。

建物の中に入ると室内は、ほこり臭さと異様なまでの冷気に包まれていた。

勘弁してくれ。化け物屋敷の典型的パターンじゃないか。

辺りを警戒しながら見渡すと、暗闇の中に少年が立ちすくんでいるのが見えた。

いそいでそちらに駆け寄ると彼がこう言う。

「さあ。今夜の晩餐会の幕開けだよ。君は・・・まあ死なないように隠れて。逃げ回っていればいい」

??俺には少年の言う言葉の意味がいちいち解せない。

なんだって言うんだ。こんな所まで来て一体何がしたいんだ。

そして、彼が今言った言葉。隠れる？逃げ回る？

やめてくれ。不吉な予感しかしないじゃないか。

そっこう考えている内に少年が、今までと表情を一転させて俺に告げた。

「ほらほらほらあ。来たあ、今宵パーティのえせの共馳走達が」

初めて見た、彼の笑顔を。残酷な表情カオだった。

狂喜に満ちあふれたその笑みが、俺の躰を一瞬で凍結させた。

ゾクリッ。悪寒が全身を走り抜ける。

「……………何か来る。」

彼の言っていた何かがせまってくる。凄まじい速さでドクン。ドクン。ドクン。

「……………ドダツッ。」

俺の鼓動と物音が重なる。

「……………来た。」

そう思った瞬間だった。

前方に見える階段から黒い影が飛び立った。

（……………っっあ）

全身が硬く硬直する。心臓が凍り付く。

化け物だ。理性を失い、人々を喰らう。悪しき生き物。

俺たちが最も恐れるべき存在が高速で頭上から降りてくる。

「ひっ。……………っ」

一瞬止まった心臓が再び動きだし急激に鼓動を速める。

主である少年が急にまともに見えた。理由は見つからないが何故かそう思ってしまった。

距離を縮めた影が俺に襲いかかる。が、しかし……

俺は化け物に肉塊にされはしなかった。

？何故だ。

時間差がありその後、俺の顔面に赤い液体が飛び散る。

「……………っっあ！???」

液体は俺の頬をつたい顎から床にしたたり落ちた。

恐る恐るその液体を見やる。

血だった。まぎれもない、淡い紅色をした鮮血だ。

もう、本当にわけがわからなくなり。気が動転する。

吹き出した血の主は床に倒れ伏していた。

荒い呼吸をたて必死の形相で俺の背後を睨みつけている。

黒い布に身を包んだ、禍々しい形姿の魔物だった。

鋭い牙を強く噛みしめて見ている。何かを。

ハツとなってその化け物の視線の先に振り返った。

案の定そこにいるのは例の少年であったが、その表情はいつもと違っていた。

「……………」嗤っていた。地でもがく同胞を見下ろしてさつき見た表情は、より恐ろしくなつて俺の精神を蝕んだ。

満面の笑みを浮かべて化け物を見据えている。とても嬉しそうに、楽しそうに。

ああ、これが彼の本能か。

先程屋敷の屋上で少年が言っていた事を思い出した。

「僕のことを少し知っていてもらわないとね」「知ってしまった。知りたくなかった。」

こんなにおぞましい物なら知らない方が良かった。

それでも後悔なんて遅すぎたんだ。もう俺は見てしまったんだから……。

さらにこの後、悪夢が俺に追い打ちをかける。

感じたのは、血の臭いと断末魔の響く音、それから一生消えない恐怖の傷跡。

嗤う表情（後書き）

うにゃあ~~~~~^・^

なんか、あんまりグロくなんなかったけどちょっと出たよね（言い逃れ

まあ〜こんなモンかな・・・アハハ

次は「連続魔物バラバラ殺人事件」の巻  
お楽しみにで~~~~~すっつ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7674j/>

---

血 + @ - @ = 必要性

2010年10月10日00時29分発行